二条中学校便り

第　3　号
平成１９年５月１１日
京都市立二条中学校

憲法月間5月～基本的人権について考えてみよう

　校門付近の赤と白のハナミズキがまぶしい爽やかな季節になりました。昼休みのグランドからは元気溢れる生徒の歓声が聞こえます。1年生の家庭訪問期間も終わりました。学校生活の各場面で充実した取組が繰り広げられています。以下は、3年生修学旅行の感想文からの抜粋を紹介します。裏面の憲法月間にちなんでの校長講話とも関連して、歴史を深く見つめ自分の問題としてとらえようとする姿勢がうかがえる文章です。　（3年生は修学旅行感想文をもとに学年スピーチ大会を計画しています）

沖縄修学旅行感想文より

＊　元ひめゆり部隊の与那原さんの話をお聞きして。一番ショックを受けたのは親友が目の前で死んでしまった時の話です。私がその場にいたら…と想像することもできません。戦争は人の命も、人の幸せな生活も全て奪ってしまうものなのに、今も戦争をやっている国があるのは本当におかしいと思いました。

＊　与那原さんの顔と手話通訳をしてくださる人の手をじっと見つめた。あの戦争の状況で解散命令を出した軍に無性に腹が立った。「死にに行け」といっているのと同じだろう。通訳の方の手がぼやけて見られない。涙が出そうになった。現代の日本が戦争がないから平和だとは限らない。戦争のことをずっと語り続けていかなければいけない、僕たちは自分の社会をきちんと考えなければ、と思った。

＊　カーカヤックでは、ちょうど引き潮にあたり、カニの穴があっちこっちにあって楽しかったです。ペアを組んでカヤック講習をしました。友達に抜かれてしまって悔しくてスピードを上げようとしたのに、まっすぐ進めずどうしても右方向に曲がってしまう…。でも、前に座っている友達は、後ろの私をふり返りながら合図をだしてくれたのはとてもうれしかった。

春体～堂々の入場行進～

明日　野球部　春の頂点に挑む！

　4月29日（祝）雲ひとつない空の下での春体開会式を皮切りに、各体育系部活の熱戦が繰り広げられました。バレーボール部は初戦を女子バスケは2回戦まで突破し勝利を味わいましたが、あと一点あと一本が届かずに悔し涙を流した部もありました。3年生を中心に最後の夏の大会を目指して、新たに毎日の練習を悔いのないものにしていきましょう。

　秋季大会準優勝の野球部は順当に勝ち進み、明日12日（土）午前11時から新しくできた伏見桃山球場（伏見キャッスルランド跡地）で準決勝・決勝戦に挑みます。対するは桂川中学校。二条中は打撃の調子がよく、内野の守備が固く、チーム全体が上り調子です。目指せ優勝！
健闘を祈ります！

人権講話～5月1日全校集会　校長の話より

わが国の憲法は1947年（昭和22年）5月3日に施行されました。当時、第二次世界大戦で世界中で5600万人もの戦争犠牲者を出し、日本の国は敗戦のどん底にありました。世界の国々も戦争の被害の中で「再び戦争の惨禍を繰り返してはならない」と強い反省の上に立ち平和を希求した時期でした。

この新制日本国憲法には基本的人権の尊重、国民主権、平和主義という3つの大切な理念が基本原則としてうたわれています。その中でも特に基本的人権の尊重は、日本の国の政治を行う上で最も尊重されなければならないものです。その意味で3つの基本原理の最初に掲げられています。

ここで例年のように、皆さんに人権に関する話をひとつ紹介します。内容は今年度の3年生が修学旅行のテーマに取り上げた平和学習の取組からの話です。私たちは今年度の修学旅行の目的地のひとつにひめゆり平和祈念資料館を選びました。そこでフィールドワークとして資料館の各展示室の見学と資料の検索を行いました。そこから得た資料のひとつにひめゆり平和祈念資料館の設立の趣旨があります。以下、引用します。

米軍の沖縄上陸作戦が始まった1945年3月23日深夜、沖縄師範学校女子部･沖縄県立第一高等女学校の生徒220人教師18人は、那覇市の南東5キロにある南風原の沖縄陸軍病院に配属されました。3月26日米軍は慶良間列島に侵攻、4月1日には沖縄本島中部西海岸に上陸。米軍の南下に従い日本軍の死傷者が激増し、学徒たちは護送されてくる負傷兵の看護や水汲み、死体埋葬等に追われ、仮眠もとる間もなくなっています。5 月下旬米軍が迫る中、学徒たちは日本軍とともに陸軍病院を出て、本島南端部に向かいました。そして激しい砲爆撃の続く中で6月18日を迎えます。学徒たちは突然の解散命令に絶望し、米軍が包囲する戦場を逃げまどい、ある者は砲弾で、ある者はガス弾で、そしてあるものは自らの手りゅう弾で命を失いました。教師と学徒240人中136人、在地部隊その他で90人が亡くなりました。米軍は沖縄戦を、日本本土攻略の拠点を確保する最重要作戦と位置づけ、物量のある限りを使い、対する日本軍は米軍の日本本土上陸を一日でも遅らせるために、壕に潜んでの防衛･持久作戦をとりました。沖縄を守備するため、軍は沖縄県民の根こそぎ動員を軍人兵隊以外のすべての人も企てると同時に、学徒隊を編成して生徒たちの戦場動員を強行、持久戦･根こそぎ動員は12万人余の沖縄住民の犠牲をうみました。

あれから40年以上たちましたが、戦場の惨状は、私たちの脳裏を離れません。私たちに何の疑念も抱かせず、むしろ積極的に戦場に向かわせたあの時代の教育の恐ろしさを忘れてはいけません。戦争を知らない世代が人口の過半数を超え、いまだに紛争の絶えない国内･国際情勢を思うにつけ、私たちは一人一人の体験した戦争の恐ろしさを語り継いでいく必要があると痛感せざるをえません。平和であることの大切さを訴え続けることこそ、亡くなった学友･教師の鎮魂と信じ、私たちはこの地にひめゆり平和祈念資料館を建設いたしました。　　（1989年設立趣意書より）

私たちは資料館を見学の後、戦争体験講話を当時ひめゆり学徒隊として陸軍病院に動員されていた与那覇百子さんから聞くことができました。講話終了後、私たちはぼくたちの平和宣言を全員の思いをこめて力強く唱和しました。そこで私がはたと気がついたことは、元ひめゆり学徒隊の証言者である与那覇さんにしろ、ぼくたちの平和宣言の詩の作者である上原凜さんにしろ、それぞれの表現の根底に流れる主潮低音とも呼べる主張が、実は戦争は最大の人権侵害であるという普遍的な真実であったということです。戦争は私たち人間の生きる権利を奪い、教育を受ける権利を奪うものであるということでした。

私を含めてだれもが人間として生きていく上での基本原理を忘れずに、さまざまな人権問題に関心を持ち続けたいです。これだけ情報の豊かな社会で生きている私たちは、個人的にもあらゆる情報を得ることは比較的容易ですが、自分の行動を通じて学び得た人権意識は、終生自分の血の中を流れ続けるに違いありません。3年生の皆さんの思いを込めた平和宣言をお聞きになった与那覇百子さんの表情には、次の世代に確実にリレーされたであろう平和と人権への深い思いに安どの色が浮かんでいました。みなさん方が今後とも知的な学習とともに行動や実践を伴う人権学習をしてくれることを期待しています。